

福井大学附属病院
小児科

医療最前線からのレポート

CLOSE UP NOW!

高度な専門医療を深め、 地域の現場において 生きた小児医療に取り組む。

慢性的な小児科の医師不足が進む中、
福井大学医学部附属病院小児科では、ここ数年入局者が増えつつある。
そのけん引役を担うのが総合周産期母子医療センターはじめ、
アレルギー・免疫、神経・発達、代謝・内分泌など先進的な研究分野だ。
高度医療、専門医療の担い手として、
地域の枠を超えた医療を展開する小児科の医師たちに聞いてみた。

高度医療を守る 体制づくり

福井県下の小児医療は、7〜8年前から慢性的な小児科医不足に悩まされてきた。国立大学の独法化や医師の卒後臨床研修制度が新しくなり、各大学から派遣されていた医師が引き上げることが背景にある。福井県の場合、小児科医は京都や奈良の大学、金沢大学などからも派遣されていたが、大きな基幹病院が嶺北の福井市とその周辺に集中していることもあって、とくに嶺南地域や奥越地域の勤務医が不足する時代が続いた。その間、県下の高度医療と地域医療を支えてきたのが福井大学医学部附属病院小児科である。

「大学の最も大きな使命は、高度医療を守ることです。とくに血液悪性腫瘍疾患やNICUなどは小児科医療としては一番、高度な医療を要する分野。それが、医師がいなくなったから維持できないでは済まされません」

そう振り返るのは小児科の大嶋勇成教授だ。当時、福井大学も小児科医が充足していたわけではない。それどこ

ろか、医師の補充がない地域には、新設医科大学が地域医療に貢献するという性格上、不足分を福井大学がカバーしないとけない状況にあった。

「地元の大学病院として、小児の高度医療と地域医療を絶対にカバーし、堅持するための体制を整えるためには、少ない人数の中でみんながカバーし合うしかありません。NICUは国内留学で研修したスタッフが戻ってきてくれ、がんセンターで研修したスタッフも戻ってきたことで、診療体制が整いました。わたしが教授になった一年目、平成22年から23年がスタッフ数も少なく、正直いちばんきつかった」

しかし厳しい状況を潜り抜けてきたことが、「小児科医一人ひとりのレベルアップにつながり、地域の基幹病院、拠点病院の勤務を経験することで大学だけでは経験しにくい小児医療に携わる機会をもつことができた」のも事実。そうした高度医療、地域医療、そして後継者の育成を柱に据えてきたことが、確実に実を結びつつある。「教室のポリシーとして、必ず高度医療＋次世代の人材育成を基本にしています。昨年、今年とコンスタントに医局員が入ってき



アレルギー・ 免疫部門の スペシャリスト

ていますので、その成果が徐々に表れてきているのを感じています」
大嶋教授が考える小児医療は「次世代を担うこと、その生命、健康を守る」と。その医療を展開する体制が着々と整いつつあるといえよう。

さてそうしたなかで、福井大学医学部附属病院小児科は今、どのような医療に力を注いでいるのか。まず診療体制は、アレルギー・免疫、血液・腫瘍、神経・発達、新生児・内分泌・代謝の各グループが、専門的診療を行うとともに、相互に連携して集学的な治療を行っている。これ以外にも、循環器や腎臓に関しては福井循環器病院、福井赤十字病院の教職員が専門外来を担当し、小児科の主要な専門分野をカバーしている。

大嶋教授の専門でもあるアレルギー・免疫部門は、気管支喘息、食物アレルギーなどのアレルギー疾患はじめ、小

児膠原病、クローン病、潰瘍性大腸炎、原発性免疫不全症の診療を行っている。なかでも食物アレルギーは近年、患者が増加しているなど、小児医療の中でも関心が高まっている分野。小児気管支喘息とともに、通常の診療や検査のほか小・中学校などへの学校管理、啓蒙活動などにも力を注いでいる。

食物アレルギーについては経口負荷



PROFILE

大嶋 勇成 おおしま ゆうせい

教授

1985年、京都大学医学部卒。兵庫県立塚口病院、兵庫県立子ども病院で臨床研修後、1993年、京都大学大学院博士課程修了。福井県立病院、国立療養所南京都病院などで勤務。1995年からモントリオール大学附属ノートルダム病院アレルギー研究室。1998年、福井大学医学部に赴任。2010年から現職。

【専門領域】アレルギー・免疫
【所属学会】日本小児科学会、日本アレルギー学会、日本免疫学会など

CLOSE UP NOW!

医療最前線からのレポート
福井大学附属病院 小児科



看護師もNICU専任の認定看護師やベテランが揃い、格段に変わりました。経験豊富な看護師が常時、NICUにいてくれるのでとても心強いものがあります。小児科病床のときは、呼吸器が外れて回復期に入った新生児をどこで診るかも大変でしたが、GCUが6床になったことで移動がスムーズになり、余裕をもつて重症度の高い新生児の管理に専念できる体制が整ったといえます」

そんななか、小児科では昨年、福井県下で初めて「在胎22週」という超未熟児の出産を、二例立て続けに経験した。産婦人科との強力な連携で、究めて難しいとされる手術に立ち会ったNICUの特命助教・奥野貴士医師が振り返る。

「22週の超未熟児出産は当院でも例がなく、生存確率は3割程度という非常にリスクが高い症例でした。一例目は450g、二例目は600gちよつとだったと思います。いずれも切迫早産で母体搬送されてきたときは、難しいかもしれないという緊張感が走りました。幸いにも生命蘇生の兆候はあったので、あとはNICUのチーム力で小さな命を守る一心でした。二人ともその後の経過は順調で、元気で退院されました。わずか22週の発育の超未熟児を支えたのはチームの結束力と、何より看護師さんの存在です。新生児のどんな小さな変化も見逃さない看護師さんたちの働きが、NICUを成長させる原動力です。小

NICUの症例でも明らかのように、大嶋教授が掲げる小児医療の方針は、チーム全体で動けること。現場はもとより、たとえ小児科病棟担当であってもNICUのことはわかるし、情報共有できるようにしておくことが重要だと考えている。その一方、大学病院を離れて地域の基幹病院、拠点病院での勤務を経験することも奨励する。地域の病院に赴任したときに、大学病院の高度医療、専門医療を少しでも地域医療に還元できるようにするための。

「田舎の拠点病院に勤務したから専門医療ができないではありません。むしろ、その地域のコメディカルと一緒に自分がリーダーシップを発揮して引っ張っていく専門性の高い小児科医をめざすべきです。たとえばNICUを経験したら、新生児のその後にも関心を

持っていたきたい。わたし自身、重症身体障害児が入院する病院の勤務を経験して、NICUを出た後の患者さんのその後や、家族の皆さんとのふれあいを知ってNICUの重要性がよりわかった気がします」

大学の高度医療、専門医療を深めるために地域の現場を経験する。そのためにも、専門医+サブススペシャリティをもった小児科医の育成に力を注いでいる。

PROFILE

徳力 周子 とくりき・しゅうこ

助教

1999年 福井医科大学医学部卒。福井医科大学医学部附属病院、大阪赤十字病院で臨床研修後、国立福井病院に勤務。2008年 福井大学医学部大学院博士課程修了。2008年から現職。

【専門領域】新生児

【所属学会】日本小児科学会、日本周産期新生児医学会、日本未熟児新生児学会など

血液・腫瘍部門では、症例数の少ない白血病や固形腫瘍などは多施設共同研究の治療プロトコルに基づいた治療を行っている。福井大学病院では小児悪性腫瘍の難治症例以外にも先天代謝異常症や原発性免疫不全症を対象に、小児の造血幹細胞移植が可能な県内唯一の施設として多数の移植実績もある。

神経・発達部門では、平成23年10月に開設された「子どものこころ発達研究センター」とともに、共同で診療にあたっている。主に発達障害の子どもや、発達障害のある兄弟支援を、小児科の



試験を行い、症例によっては経口免疫療法などの先進的な治療に取り組む。気管支喘息の分野では、通常の呼吸機能検査に加え、呼吸中のNO測定、モストグラフによる末梢気道の呼吸機能測定を通して喘息の長期管理を行っている。大嶋教授は、日本小児アレルギー学会の小児気管支喘息治療・管理のガイドライン、食物アレルギーガイドラインの作成委員を担当するなど、アレルギー・免疫分野のオピニオンリーダーでもある。

「最新のガイドラインに基づいた治療はもちろんですが、ガイドライン改訂に反映できるようなエビデンスに基づいた治療も展開していきたいと考えています。とくに大学病院の使命である基礎研究で得られた結果を臨床に反映したい」と今後の展開にも意欲を示す。

小児神経専門医が担当している。内分泌・代謝部門は、小児科の初代教授の専門が内分泌・代謝異常であったこともあり伝統的に先天代謝異常症に関する様々な研究を行ってきた。特にタンデム・マスを利用した新生児マスキング検査はその一つで、全国に先駆けて福井大学病院で実施されている。生まれたばかりの赤ちゃんの先天異常を発見する検査であることから県外からの検査依頼も数多い。

22週の超未熟児のその後

そしてもう一つ、福井大学病院の高度な小児医療を支えているのが新生児部門だ。平成24年8月に、総合周産期母子医療センターが新たに開設され、それまでの未熟児室6床だったのが、NICU6床、GCU6床に増床。NO吸入療法、脳低体温療法など、より高度で専門的な新生児医療が展開できる環境が整った。福井大学病院の産婦人科と連携しながら、NICUの管理、運営にあたっている徳力周子助教がメリットを強調する。

「これまでも超未熟児を受



PROFILE

奥野 貴士 おくの・たかし

特命助教

2004年 福井医科大学医学部医学科卒業後、福井県立病院・福井大学にて初期・後期・専門臨床研修を行い、2010年より長野県立こども病院新生児科にフェローとして勤務。2012年より現職。

【専門領域】新生児学

【所属学会】日本小児科学会、日本周産期新生児医学会、日本未熟児新生児学会

け入れていたのですが、病床数が6床しかなく、満床になるとなかなか受け入れが難しい状態でした。看護体制についても、未熟児診療部門と通常の小児病棟を兼務していたのが現状です。しかし総合周産期母子医療センターになって、小児科病棟と切り離され完全に独立。NICUが6床、GCUが6床になり、

